

私は現在神戸市のある介護老人保健施設に通ってリハビリに努めている「要介護3」の人間である。要介護は1から5に分かれ、その判定は介護保険に基づく保険機関（自治体）によって行われる。要介護5の場合は「歩行や両足での立位保持などの動作ができず、排泄や食事もできない場合」が考えられているようである。

思い出すと全身麻酔による手術のあと私は完全にこの要介護5の状態だった。そんな時、娘や家族の来訪と手術に関与されたお二人のドクターのご来室と激励は何物にも代え難い恵みであった。もう一つ社会から隔離された私の唯一の連絡はナース・コールになり、それに応じて入室される看護師さんの一言一句が私を支えたり、悲嘆させたりすることになる。

幸せなことに、私はこれまで健康で、大学を辞めてからも公私の

### 要介護人生のはじまり

随想

新野幸次郎

いろいろな仕事に関係させていただいてきた。しかし、この状態では、もはや何の役にも立てない。私と同じように要介護者になられたある私立大学の元学長さんは先日もある雑誌の随筆欄に「介護保険による支援を受け、利用しながらむしろ心身を鍛えてやがて介護の必要を無くする」という決意を述べておられた。

私にはその気概はない。しかし、大学を辞めてから年4回、28年間続けてきたゼミ生諸君との読書会でなくても、これからも話し合いの機会を続けられるとよいと思うこの頃である。人間は最後まで自分の存在意義を正当化できるものを持ち続けようとするものである。しかし、そのためには、私はこれからますます謙虚になり皆さんにご迷惑をおかけしないように努めなければならぬと覚悟している。

(神戸大学名誉教授)

6月15日(月) 神戸新聞夕刊分

「誰これ？」がほとんどの人でしょう。私も最初は見逃がしましたが、この方は私の学生のと時の学長です。

老いてなお、というよりも自分の役割を今の自分に与えておられる。

日々の不平不満に忙殺されている自分を恥じました。